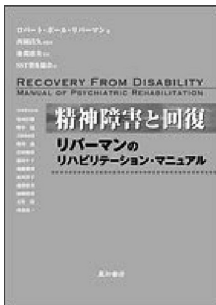


■ 書 評



精神障害と回復：リバーマンの リハビリテーション・マニュアル

ロバート・ポール・リバーマン 著
西園昌久 総監修，池淵恵美
監訳，SST 普及協会 訳
星和書店 2011 年 3 月
492 頁，定価 6,930 円

本書は，社会生活技能訓練（SST）をはじめ，精神障害リハビリテーションにおける多くの革新的な技法の開発とセラピストの育成を手掛け，精神障害をもつ人々のリカバリー（回復）の実現のために心血を注ぎ続けてきたロバート・リバーマン教授の，長年にわたる臨床実践の集大成と呼ぶに相応しい著書である。

精神障害からのリカバリーとは，客観的には「日常生活機能や生活の質（QOL）をひどく妨げる症状がなく自立して生活している」「仲間とともに地域社会の場で，社会的あるいはレクリエーション的な活動や行事に参加している」，主観的には「将来への明るい希望をもっている」「自分の生活や人生に対して個人的に責任を引き受けている」などの状態にあることをいう。その達成に向けて，精神障害をもつ人々，家族，治療者が協働して歩む道標が本書に明示されている。

具体的な章立ては，1. リカバリーへの道としてのリハビリテーション，2. 精神障害リハビリテーションの原理と実践，3. 疾病管理，4. 機能的アセスメント，5. 社会生活技能訓練（SST），6. 治療とリハビリテーションに家族の関与を得る，7. 職業リハビリテーション，8. リハビリテーションサービス提供のための手段，9. 特定集団のための特別援助，10. リハビリテーションと

リカバリーにおける新たな発展，となっている。数多くの図表と事例の提示がなされ，各章末には「まとめ」と「キーポイント」が掲げられており，読者の理解を促すように，きめの細かい配慮と工夫が施されている。

真のリカバリーを模索し達成するためには，妥協やごまかしは一切許されないゆえであろうか，「理論は常にリハビリテーションの僕（しもべ）でなければならず，支配者であってはならない」「私たちはいつも目の前の患者個人を治療しているのであって，統計的な平均値や有意差のレベルを治療しているわけではない」「リカバリー運動の美辞麗句に酔っている者にとっては，地域でのリカバリーのための臨床的・組織的な必要条件はその酔いを醒まさせるようなものである」など，治療者に対する厳しい戒めの言葉が随所にみられる。しかし，真摯に地道な努力を続ける者に対しては，「リカバリー競争は足の速さではなく，粘り強さで勝利する」「リカバリー志向のリハビリテーションというのは，そう簡単に達成されるものではなく，むしろ何度か落胆したり，失敗してもそれに屈することなく踏ん張った後に得られるものである。臨床家が決してあきらめなければ，その努力の恩恵が精神障害のある人にもたらされるのである」と，心から勇気づけられる言葉を投げかけてくれるのである。まさに本書は，父が子どもに遺すような，厳しくも優しい言葉で満たされている。

さいごに，格調高い表現が多いゆえに，その翻訳には並々ならぬ苦労があったのではないかと推察されるが，リバーマン教授の言葉を正確かつ分かりやすく私たちに届けてくれた翻訳者の先生方に，心より敬意を表したい。

精神医学に携わる者にとって必読の書といえよう。

（根本隆洋）